

19 頸動脈ステント留置術における血管内視鏡の使用経験

阿部 博史・渡辺 秀明・遠藤 浩志
立川総合病院循環器・脳血管センター
脳神経外科

【目的】頸動脈ステント留置術において、最近使用可能となった細い血管内視鏡を用いて頸動脈の内腔の観察を行ったので、その使用経験について報告する。

【対象と方法】症例は6例。使用した血管内視鏡はFiber Teck社Fiber Catheter AS-003（外径075mm，焦点深度5mm，視野角度70度）で、血栓吸引用のExport Catheterをguidingとして用いた。Percu Surgeによるdistal balloon protection下に、PTA後またはステント留置後の内腔面を、内頸動脈distalから頸動脈分岐部にかけて観察した。

【結果】血管内腔の状態をかなり鮮明に観察することができた。PTA後の観察でうすい内膜の一部がぴらぴらと剥離している像が1例で見られ

た。ステント留置後の観察ではステントが綺麗に圧着している像が確認された。大きなdissectionを起こし速やかにステントを留置した1例で、血液の付着した真っ赤な内膜が広範囲にステントの編み目から突出しているのが観察された。Distal protection balloon（Percu Surge）との併用においては操作中の血液洗浄の限界から観察できる範囲は頸動脈分岐から約1cm以上distalまでであった。頸動脈が直線的でないためguidingが壁にあたり全周の観察はもともと困難であるが、血栓吸引用catheterをguidingとして挿入する場合、先端の切り口が斜めのため観察方向が一層制限された。Fiber Catheter自体の視認性も不良で、先端とguidingとの位置関係は内視鏡像から判断する必要があった。

【結論】今回使用した血管内視鏡は操作性や視認性においてまだ改良の余地があるが、頸動脈ステント留置術においてその限界を理解して用いれば有用性は十分期待できる。